

島根大学 ラフカディオ・ハーン研究会 ニューズレター 第18号

編集：島根大学ラフカディオ・ハーン
研究会事務局
所在地：〒690-8504
島根県松江市西川津町1060
島根大学法文学部 宮澤研究室
発行：2023年7月8日

会長就任のご挨拶

渡部 知美

吉川先生からバトンを受け取り、2022年10月から会長をしています。専門はアメリカ文学です。島根大学法文学部在職中の平成16年度から、「日米文化比較」の授業も出さなければならなくなり、文化比較の本等を読みあさりました。ハーンの“The Japanese Smile”もそのうちの一つです。明治時代に日本在住の西洋人に不可解に映った日本人の微笑みを捉えた作品です。また、8年ほど前に国が示した三つの選択肢のうち、島根大学が「地域貢献」を選んだということもあり、二年生向けの授業で毎年ハーンの作品を読むようになりました。

ハーンは西インド諸島に行ったのと同じ感覚で日本へ向かったのだと言われています。19世紀後半は、エキゾチシズムを抱いて西洋人が東洋へやって来るようになったとは言え、東洋は文化的に劣っていると捉えられていた時代です。

しかし、ハーンは日本人女性を法的に正式の妻としました。日本在住の西洋人からは「土人になった」と揶揄されます。そこには、ハーンの家族を思う気持ち、生まれてくる我が子に財産を残したい、両親の離婚で自分が味わったような惨めな思いをさせたくないという気持ちが働いていました。一方的に離婚された自身の母親を思う気持ちもあったと思います。ハーンの母親への思慕、人間としての暖かさ、倫理性は、時代を超え、文化的違いを超えて、心に訴えてきます。

ハーンの「菜の花の せかいに今日も いる日かな」という俳句は、彼が家族との生活に穏やかな幸せを見出していたことを感じさせます。つらいことを経験したからこそ、異郷の地での縁とはいえ、有難いこと、幸せと捉えることができたのだと思います。母親との別離、左眼の失明、養育してくれた大叔母の破産等、ハーンが味わった心の痛み、悲しみも伝わってきます。同じ視線の高さに立って、共感できるものがあるからこそ、卒論でハーンの作品を扱う学生もいるのだと思います。

2006年に本研究会は設立され、もうすぐ20周年を迎えます。毎月第二土曜日に、ハーンが再話した物語や紀行文、随筆等を原文で精読し、感想を述べたり意見交換をしたりしています。本研究会での活動が、生きがいの一つになっているという会員の方もいると思います。また、コロナで入学式やサークル活動もなかった学生会員にとって、「ラフカディオ・ハーン日めくりカレンダー」作りが達成感の感じられること、地元の再発見につながったということを楽しんでいます。本会を長い間支えてくださっている恩師、常松正雄先生には心から感謝をしています。菊田緑さんをはじめとする今年度3月卒の会員みなさん、卒業おめでとう。微力ながら、私もこの研究会のために頑張ろうと思います。吉川先生、4年間お疲れ様です。より多くの人にとってハーンへの理解が深まること、本研究会が発展することを願っています。

会長退任のご挨拶

吉川 進

昨年の総会で会長を辞し、渡部知美先生にその役を引き継いでいただきました。ほんの数年の期間でしたが、会員の皆様方、特に役員の方々には、地道な仕事を誠意をもって実行していただき感謝いたします。

わが島根大学ラフカディオ・ハーン研究会は、ハーンの作品を訳読し、難解な部分は互いに意見を出し合い、作者の真意に近づくために、語法は勿論、言外に意図することを推察し、自由に意見を出し合う楽しい読書会であります。

この研究会もコロナパンデミックの影響を受け、出席者数が減少し、不安定なことが度々ありましたが、その中にあり、大学の学生さんが多数加入していただいたのは頼もしいことでした。会員の年齢も90台から20台までと幅広く、そのため作品に対する考え方は多様であり、実に参考になります。

会の充実を図る最も重要な要素は、教材(テキスト)の適切な選定であることは申すまでもありません。

ん。会の構成メンバーが、英語教育者、家庭の主婦、農業従事者、ボランティア活動家等、会員の多様性を考慮する必要があるからです。

この数年で最も特徴ある事業は、最長老の常松元会長によるハーンと西田千太郎氏間の手紙の訳本が八雲会より出版され話題となりました。また、同氏による英語教師の一生を回顧した講演、それと同時に、ハーンの直筆・コピー等貴重な作品が大学図書館で展示されました。その際、図書館の方々に大変お世話になりました。また、先に述べた新規加入の学生によるハーン関係の写真入りの日めくりカレンダーは実に有益な作品でした。

会報（ニューズレター）も号を重ねて、会の動向が多面的に把握でき好評です。この会報は宮澤先生のご配慮で紙の質が立派になり、内容に重みがぐっと増しました。また常松元会長が時に応じて事務部に適切な助言をしていただき助かりました。

最後に、新会長渡部先生を中心に会が着々と充実発展していくことを切に願い、辞任のご挨拶いたします。

【研究小論】

一つの試案として

毛利 直巳

1. はじめに

毎月開催の読書会に備えて、ハーンの文章を読み進めると、時おり文法的には「？」がつく文章に出会うことがあります。

ではなぜ、文法的には「？」と思われる文章をハーンが書いたのか、その意図は何かについていろいろな考え方があるとは思いますが、私は、文法（ことばの仕組み）というよりは、文脈の中のある状況がそれを規定しているのではないかと捉えています。

以下拙論ではありますが、一つの試案として具体例とともに、述べてみたいと思います。

2. 取組の具体例：

①「形容詞+something」型と②「something+形容詞」型について

これまで読み進めた作品では、上記の2つの型があり、文法的には②が正しい用法とされています。しかしハーンは①も同様に使用しており、その理由を具体的に考えてみます。

まず、次の2文を比較してみます。（一は筆者）

① Certainly the fact of this ability to discern in the composition of faces that indefinable something which welcomes or which warns, (以下略)

(“First Impressions” P.195 L.L.10~12)

② All the riddles and contradictions of our aesthetic systems are natural consequences of the delusion that beauty is a something absolute, (以下略)

(“Beauty is Memory” P.203 L.L.19~21)

①の「indefinable something」を文字通り訳すと「不明瞭な何か(もの)」となります。ではなぜ「something indefinable」としなかったのか。

私は、「indefinable something」の次の文「which welcomes or which warns」がその鍵を握っていると考えます。「歓迎したり、または警告を発するもの」、つまり、はっきりとした実体のないもの、不確実な要素が強いものだからこそ「不明瞭な何か(もの)」としてハーンは捉え、indefinable という言葉を強く打ち出したのではないかと考えます。

続いて②の「something absolute」の語順については、考えてみます。②の前段に次のような記述があります。

-There is no such thing as beauty-in-itself.

(“Beauty is Memory” P.203 L.18)

「本質的な美など存在しない。」という前文を受けて、「absolute something」とすれば、美を絶対的なものとしてとらえることになり、前文と矛盾することになります。

だからこそ、ハーンは「something absolute」、「何かしら絶対的なもの」として美を捉え、表現したのではないかと考えます。

3. おわりに

今回の私の「文脈の中のある状況が語順に大きな影響を与えているのではないか」という試案が、ハーンの他の作品についても同様に当てはまるかどうかは甚だ疑問です。

しかしその一方で、試案の内容の正否は別として、難解なハーンの文章を的確に読み進める上で、私自身、さらに多くの試案を持つことの必要性を痛感しています。

少しずつではありますが、そのための歩みを進めたいと思います。

【エッセイ】

わたしたちはリレーしている

宮澤 文雄（島根大学法文学部）

日本を目指してバンクーバーからアビシニア号に乗船し、およそ2週間かけて横浜港にたどり着いたラフカディオ・ハーンは、以来14年のあいだに松江、熊本、神戸、東京と様々な土地をめぐる。晩年に避暑として訪れた焼津も愛した場所で、6度の夏を過ごしている。いずれの土地も作品に描かれ、没後はそこにハーンの功績を伝える記念館なり記念碑なりが建てられてゆく。しかし、どういふわけだか、一度も訪れたこともなければ、作品でも触れたこともない富山にはハーンの全蔵書がある。不思議である。それには次のような経緯があった。

今からちょうど100年前、大正12（1923）年9月1日に発生した関東大震災による大火で、東京では多くの貴重資料が灰燼に帰した。こうした大災害によって、いつか蔵書も同じ運命をたどるのではないかと恐れた小泉家は、蔵書を一括保存できる大学へ譲渡することを決めた。これにいち早く手を挙げたのが法政大学だった。しかし、法政大学が原稿を除いた書籍のみの購入を希望したため、交渉は難航する。

一方その頃、富山では10月の開校に向けて旧制富山高等学校の創設準備が進められていた。のちに初代校長となる南日恒太郎（1871-1928）は、ハーンの教え子であった実弟の田部隆次（1875-1957）から蔵書の件を聞くと、一晩考え抜いた末、小泉家に購入を申し入れる。資金の当てではなく、屋敷を売却する覚悟だった。そうしてでも手に入れたかったのは、富山を教育文化県にしたい、という願いがあったからだ。そのためには同地に優秀な教員を集める必要があり、ハーンの蔵書はそのきっかけになると思われたのだ。

その南日の思いに応えたのが、北前船の交易で財をなした東岩瀬の資産家、馬場はる（1886-1971）である。まだ高等学校がなかった富山では、中学よりも上級の学校に進学するためには金沢や新潟、東京などに出て行かねばならず、また多額の費用がかかることから、子どもにも親にも苦労が絶えなかった。長男正治の受験を通して身に染みていたのは、県内に高等学校があればよいのに、と考えていた一

人だった。すでに富山高校設立のために現在の金額で100億円以上といわれる多額の寄付をしていたが、さらに蔵書を買取り、大正13年6月に開校記念として寄贈する。その後、昭和10年5月には正治の寄付により、鉄筋コンクリート平屋造りの八雲図書館（設計は松江の小泉八雲記念館[1933年]と同じ山口文象[1902-1978]による）が完成する。第二次世界大戦末期には戦禍を逃れるため、蔵書は黒部市に一時疎開するが、終戦後は同館に戻され、学制改革を経て富山大学附属図書館へ引き継がれる。

このようにハーンの蔵書は、その時々を理解者の助力によって困難を生き延びてきた。現在、ヘルン文庫は富山とハーンを結びつける象徴となり、その生かし方も多様化している。研究者によるヘルン文庫を活用した書き込み調査研究では、次々と成果がもたらされ、富山大学はハーン研究の重要な拠点になっている。富山八雲会の市民研究者による活動も熱心で、最近ではハーンの「若返りの泉」や「お団子を失くしたおばあさん」などの英日紙芝居を製作し、富山市内の小学校の学習教材として普及しつつある。小学校の英語必修化という社会的要請に対してハーンの顕彰が効果的に関わった取り組みであり、現代にハーンを生かした好例といえる。そしてヘルン文庫のハーン関連文献の充実ぶりには、歴代の担当司書の奮闘が偲ばれる。いずれも大聖堂建築のように、長い時間をかけて多くの人の手で積み上げられてきたものである。

わたしたちはハーンについて考えるとき、彼が生きていたときのことばかり考えてしまう。だが、蔵書を前にして思いをめぐらせていると、ハーンのことばかりでなく、彼の足跡を伝え守ろうとしてきた人々の存在にも気づかされる。蔵書から彼らの気配を感じ取ることは畢竟、ハーンの死後の生について考えることにちがいない。ハーン没後から120年、今この「継承」という名のバトンの走者はわたしたちである。わたしたちは誰も、常にすでに託されてしまっている。リレーしているのだ。そして視線の先には、手を振って、わたしたちが運ぶものを待っている者たちがきつといる。だからこそ、全力を出し切りたい。

〈ヘルン文庫について〉

ヘルン文庫とは、アメリカ時代から日本時代にかけて収集されたハーンの全蔵書を指す。その数は2,435冊に及ぶ。内訳は、洋書2,069冊、和漢書364

冊、『神国日本』の手書き原稿2冊(1,200枚)で、さらに洋書は英語本1,350冊とフランス語本719冊になる。ハーンの関心の裾野は広く、各国文学にはじまり、神話、歴史、哲学、宗教、東洋関係、自然科学など多岐にわたる。事典類も様々である。

これらの書籍や雑誌は、伝記や評伝だけではとらえきれない、読書するハーンの横顔を伝える。一方で、蔵書は小泉家の家族史でもある。セツが古本屋をめぐって買い求めた古書や長男一雄に英語を教えるために使ったと思われる読本などは、小泉家の日常の風景を浮かび上がらせる。一冊ごとに染み込んだハーンの記憶に触れることができるのもヘルン文庫ならではの体験だろう。関東大震災から100年という節目のなかで、南日恒太郎や馬場はるに再び脚光が当たることを願ってやまない。

ラフカディオ・ハーンの手紙展示

2022.08.23～09.26

事務局長 横山 純子

昨年9月10日の常松正雄先生の講演会「出会いと人生」に併せて島根大学附属図書館展示室で島根大学附属図書館と一緒に行った展示「ラフカディオ・ハーンの手紙—常松正雄先生講演会に寄せて」に関して、前号の「常松正雄先生出展の講演関係資料」に続いて、島根大学附属図書館資料の展示について述べる。

島根大学附属図書館所蔵のハーンの作品の初版本やちりめん本や講義録等書籍と共に、同図書館が所蔵する西田千太郎宛ハーン直筆書簡45通のうち、前期が松江時代・熊本時代、後期が熊本時代・神戸時代・東京時代と11通ずつ計22通が展示された。久方ぶりにハーン直筆の書簡が一举に展示公開されたのは有意義なことであった。

東京時代の1896年12月18日付けの書簡では、大学が学生にとって“a mere machinery to help them into political situations of some sort”となり、学生があまり勉強しないことをハーンは嘆き、“the spirit of study is dead: you can do nothing without heart...”と述べている。「何事も心がなければ成し遂げられない」と、心が大事とするハーンの教育観は現代にも通じるものがある。現代の教育現場でも実用的なものが重んじられ、文学など実用的でないものはそれほど重んじられない傾向があるが、そうした精神的なものが大事だと伝えてくれている。

ハーンの書簡には彼の心情が吐露されており、そうした手紙を送っていたのは西田千太郎に対する信頼の証である。その心情を率直に述べた書簡はハーンの思想や作品を読み解く上で重要なのである。

【読書会の記録】

事務局長 横山 純子

第154回例会

2022年12月10日(土) 13:30~15:30.

島根大学法文学部135教室 参加11名

“Hereditary Memories,” pp. 60.1-64.25.

第155回例会

2023年1月21日(土) 13:30~15:30.

島根大学法文学部135教室 参加9名

“A Drop of Dew,” pp. 173.1-177.4.

第156回例会

2023年2月11日(土) 13:30~15:30.

島根大学法文学部135教室 参加8名

“First Impressions,” pp. 187.1-190.16.

第157回例会

2023年3月18日(土) 13:30~15:30.

松江市国際交流会館第一研修室 参加10名

“First Impressions,” pp. 190.17-192.26.

第158回例会

2023年4月8日(土) 13:30~15:30.

松江市国際交流会館第二研修室 参加11名

“First Impressions,” pp. 192.26-195.17.

第159回例会

2023年5月13日(土) 13:30~15:30.

島根大学法文学部135教室 参加12名

“First Impressions” & “Beauty is Memory,” pp. 195.18-200.24.

第160回例会

2023年6月10日(土) 13:30~15:30.

島根大学法文学部135教室 参加13名

“Beauty is Memory,” pp. 201.1-204.18.

この7月は、2023年7月8日土曜日15時から島根県民会館3階307会議室で行われる八雲会の記念講演会(藤原まみ氏「ラフカディオ・ハーンの作品における群れについて—ジャック・ロンドンとの関係を足掛かりにして」)に会で参加します。これからは読書会をはじめとしている様々な活動を行っていきますので、島根大学ラフカディオ・ハーン研究会をどうぞよろしくお願い致します。

編集後記:「手を振って、わたしたちが運ぶものを待っている者たちがきつといる」、感動しました。勇気をいただきました。私たちの研究会がずっと続きますように!

(高橋栄)